

国語学者に音声学を語る資格なし

しかし、松本氏は他の言語史に関する知識からにせよ、「日本人自身が日本語の条件異音を書き分けていた」という自説のバカバカしさにうすうす気づいているだけマシ、それ以上に問題なのは、この説が発表されて30年余、未だにこの説を「有力仮説」として「ああでもない、こうでもない」と論議を続けている国語学者の皆さん！

日本中に国語学者が何千人いるかは知りませんが、80年代以降「上代特殊仮名遣い」に関する概説や論文には必ずこの「松本条件異音説」は引用されており、国語史や上代語の研究者なら、みんな直接・間接にこの説を知っています。

みんな読んでいながら、未だにこの説が生き残っているということは、筆者以前にこの説を読んだ「上代特殊仮名遣いの専門家」(≡国語学者)の中には、支持者・批判者を問わず「異音」(allophone)の概念をマトモに理解している人間は一人もいなかったということになります。

論理的にそうなるだけでなく、現実には、筆者が直接話をした数十人の国語学者や大学院生の中に、この概念をマトモに理解していた人は、文字通り一人もいませんでした。

筆者と国語学者の話は常に以下のよう。

筆者：日本人に日本語の条件異音を書き分けられるわけがないのであって……

国語学者：そんなことないでしょ？ 例えば「アメ」と「カサ」をくつつければ「アマガサ」で……

筆者：そういうのは「条件異音」とは言わないんですよ。「条件異音」というのは例えば「マンガ」の/ン/と「カンダ」の/ン/が……

国語学者：そんな定義だけの問題でしょ？ 定義変えりゃいいじゃないの。

筆者：「定義を変えろ」だったって、人間の音韻感覚は言語形成期に決まってしまうものであって……

国語学者：そんなことはどうでもいいのよ。それよりも大切なのは資料の分析。〇〇大先生のお説によれば『金光王最勝明王経』がウンヌン……藤原定家がカンヌン……

筆者がこの数年、国語学者とのこの手のバカバカしいやり取りにどれだけ悩まされてきたことか！

筆者の研究は国語学の研究ではなく、橋本・有坂氏以来約100年間、国語学分野で蓄積されてきたデータを借用して「音声学」の研究をしているのです。

そして、筆者はこれまでの国語学の業績にケチをつけているのではなく、むしろ有坂氏ら国語学の先人達の業績に敬意を払い、まずはそのデータを信頼して借用し、結果としてそれらのデータが間違っていないことを音声学的に証明しているのであって、感謝されてもいいぐらい。

ところが、松本説に対する反応を見ればわかるように、どんな分野でも「専門家」というものはみんな「井の中の蛙」、専門外のことには全く興味を示さない一方で、自分達の「縄張り」に門外漢が侵入してくると、「他の井戸のことはいざ知らず、この井戸のことは俺たちが一番よく知っている。何も知らないよそ者が何を言うか」とばかりに感情的に反発してくるもの。

専門家が専門家として食っていくためには多かれ少なかれ「井の中の蛙」にならざるを得ないのはわかりますが、言語研究者でありながら自分の母語しか研究対象にしない国語学者は、歴史学や社会学など他の分野のことはおろか、研究対象である日本語を人類言語一般の中の「as a language」として相対的に捉え、他の言語と比較してどうか、などという発想が全くない二重の意味での「井の中の蛙」。

また「縄張り意識」も人間の本能で誰にでもあるものですが、この国語学という井戸は、大学や研究機関の研究者のみならず、全国に何万人という中学・高校の「国語教師」を従える巨大井戸、その気なら一生他分野や他言語の研究者とつき合う必要はなく、他分野・他言語の研究者もその巨大勢力の反発を恐れてこの井戸の「自治」には滅多に口出しし

ないため(その点で松本氏は勇気があります)、ここの住人達の縄張り意識は特別に強固。

そういう強固な巨大井戸で育った井の中の蛙達には、上代語の研究といえは「カビくさい資料とにらめっこすること」という発想しかなく、外から藤井某などという奴が飛び込んできて、自分たちの研究方法を無視して「上代特殊仮名遣いは朝鮮帰化人の用字法」などという荒唐無稽なことを言い出すものだから、「外の世界はいざ知らず、この井戸にはこの井戸のやり方があるんだ」とばかり、「奈良時代の日本人が日本語の条件異音を書き分けられたかどうか、そんなことは資料を分析してみなければわからない。『金光王最勝明王経』が……〇〇大先生のお説によれば……」

国語学者が自らの研究対象と研究方法に愛着やプライドを持つのはご自由ですが、人が母語の「異音」を聞き分けられないのは生物学的法則なのであって、日本語の世界だけが特別なわけがなく、〇〇大先生のお説や資料の分析なんかで変えられる問題ではないのです!

要するに、外国語を学んだり外国人とつき合ったりする必要のない国語学者は、「異音」(allophone)などという概念は机上の空論としては知っていても、それがどんな現象なのか自分の目で見たことがない。だから、松本氏の単純なトリックを30年間も誰一人見抜けないのです。

「異音」(allophone)という現象をよく知り、それを研究している「音声学者」の大半は、筆者自身がそうであるように、常に外国人とつき合いのある「外国語教師」の顔を持っています。

韓国人に日本語を教えれば、語頭の濁音を発音できず、広東人(香港人)に日本語を教えればラ行音とナ行音の区別ができない。彼らの母語を聞いてみれば「異音」として明確にそれらを発音し分けているにも拘わらず。逆に日本人に韓国語や中国語を教えれば、[n]と[ŋ]の区別が出来ず、英語を教えれば[l]と[r]の区別がつかない。日本語の発音を分析してみれば、みずからも「異音」としてそれらを明確に発音し分けているにも拘わらず。

外国語教師が「条件異音」を熱心に研究するのは、どの言語に何時ど

のような「異音」が現れるかわかっていれば発音教育に応用出来るからで、日本人に区別の難しい朝鮮語や中国語の[n]と[ŋ]の感覚をわからせる為に「カンダ」と「マンガ」を発音させる、というのは教室で良く用いられている方法なのです。

このように「(条件)異音」という現象を日常茶飯事に見ている音声学者≡外国語教師にとっては、「日本人が日本語の条件異音を書き分けることはあり得ない」という命題は「角が四つの三角形は存在しない」というのと同じく議論の余地なき「自明の理」。そんな人間が「松本説」を読めば、それが「トンデモ」であることぐらい一発で気づきます。

ところが、因果なことに「異音」をよく知る音声学者≡外国語教師は逆に「上代特殊仮名遣い」なんてテーマには興味がなく、筆者以前にマトモに読んだ人間がいなかっただけ。

いずれにせよ、国語学者が後知恵でどんな言い訳しようと、松本説のトンデモさに30年も気づかなかった方々に、音声学の研究である筆者説を論評する資格などありません。

「文字資料ばかり相手にしている国語学者が音声学に疎いのは、ある意味しかたないことじゃないの。それなら、ちゃんと説明してあげればいいことで、そんなに国語学者をバカにしなくてもいいじゃないの? それなら、国語学者なんか相手にせず、ちゃんとした音声学者が集まる『音声学会』かなにかで発表すれば?」

そのとおりです。

国語学者との私的な研究会などでたっぷり時間のある時は、まずビデオなどを用いて『「異音」』とはこういう現象なんですよ」と説明し、それから本論に入ればみんな筆者の言うことに納得してくれます。しかし、そんな時間があることは滅多になく、「異音」の説明をとばして本論にはいれば、返ってくるのは「奈良時代の日本人が日本語の条件異音を書き分けられたかどうか、そんなことは資料を分析してみなけりゃわからない」という愚にもつかない反論。

国語学者相手に一々「異音」の概念なんか説明して回るのがアホらしくなってきたので、そんなことを説明しなくてよい音声学者を相手にし

ように思い、2002年の『日本音声学会』で口頭発表し、その後論文として提出したのです。

ところが、あきれたことに「音声学者」のサークルであるはずの『日本音声学会』にすら、「異音」の概念一つマトモに理解していない国語学者（や朝鮮語学者）が大きな顔をしてのさばっており、「奈良時代の日本人が日本語の条件異音を書き分けられたかどうか、そんなことは資料を分析してみなきゃわからない」……。仮にも「音声学者」を名乗る方々に対して「人は母語の（条件）異音は聞き分けられない」なんて「当たり前」のことを一々ご進講申し上げねばならないのでしょうか？

音声学者にとって、「異音」(allophone) の概念をちゃんと理解しているかどうかは些細な問題ではなく、万国共通の客観的基準による「音声学」(phonetics) と個別言語の内部基準による「音韻論」(phonemics) の区別がついているかどうかのメルクマール。音声学次元の「条件異音」と音韻論次元の「母音交替」の区別もつかないような輩に「音声学者」を名乗る資格なんかありません。

筆者は当初、この説を学術論文として発表して終わりにし、別の研究に専念するつもりだったのですが、「異音」の概念一つマトモに理解していないくせに図々しくも「音声学者」を詐称・僭称する国語学者（や朝鮮語学者）がいるおかげで、このような形で出版せざるを得なくなり、その間に5年もの時間と多大な費用を費やさねばならなかったわけで、筆者は非常に迷惑を被っているのです！！

もともと、これは国語学者（や朝鮮語学者）の問題というよりも、会員数を増やすために、そんな連中を審査もせずに入会させ、論文の審査までさせる『日本音声学会』の体質の問題かもしれません。学会の中核をなす「マトモな音声学者」の皆さんは、自分自身の研究に忙しく、「仮にも『音声学会』に入会を希望する者なら、音声学と音韻論の区別ぐらいついていて当たり前、『異音』の概念ぐらい理解していて当たり前」（筆者も最初はそう思っていました）という前提のもとに、国語学者であれ朝鮮語学者であれ誰でも入会させてきたのでしょう。

しかし、「松本条件異音説」のようなものが30年以上も「有力仮説」と

してまかり通っているのが何よりの証拠、個別言語の研究者としてはいくら高名でも、「異音」の概念すらマトモに理解していない連中が山ほどいるのであって、そんな「音声学をナメてる連中」は直ちに全員除名処分にしていただきたい！！

国語学者の皆さんが「専門家」としての意地をかけ、自らが王道とする研究方法で筆者説を否定しようと思うなら、その方法はただ一つ。もう一度『記紀万葉』の資料の山をひっくり返し、橋本・有坂氏以来約100年間に蓄積されてきた「上代特殊仮名遣い」に関する定説やデータを否定することだけです（筆者はこれらを全面的に肯定しているのです）。但し、それは「専門家の意地」を守るために、先人達の輝かしい研究業績を自らの手で否定することで、自分の足を食うタコと同じ。それでよければ、どうぞがんばっておやりになって下さい。

もう一度言うておきます。

「異音」(allophone) というものは、「当該言語で同じ音素 (phoneme) とされている範囲内で異なる音 (phone)」＝「当該言語の母語話者には同じ音にしか聞こえない範囲内で異なる音」のことです。発音し分けている本人が無意識・無自覚の「異音」(allophone) を聞き分けることが出来るのは言語的外国人だけ。

従って、①現代日本人も二種類の/O/母音を「条件異音」として使い分けている、②その「条件異音」の発現法則が上代才段甲乙音書き分け法則と一致している、ということが否定できないなら、それは必然的に「上代特殊仮名遣い外国人記述説」、少なくとも「上代借音仮名表記体系外国人作成説」を承認したということになります。

ではその「言語的外国人」とは誰か？

それは第二章で述べたように、史実から考えて、663年の白村江敗戦で大量亡命してきた百済人、及びその二世・三世世代であったとしか考えられません。そして、そのことは歴史的にそう言えるだけではなく、朝鮮語の側から言語学的に見てもやはり間違いないのです。